

私の風土記

今村 雄二郎 (株式会社アイヴィス 名誉顧問)

第八章

CSK社長 大川 功

漸く新設の電子機器部が軌道に乗ろうとしていた頃、再び私の身上に新たな問題が持ち上がった。亡くなった島田常務と付き合いのあった証券会社の役員を介して、CSK(当時コンピュータサービス)の創立者である大川功社長から、私に突然CSKに移籍の申し出があった。

同社の業績も飛躍的に拡大していて魅力を感じていたが、私1人で移籍してもたいした業績は上げられないと考えていた。そこで私および部下を含めて合計5人ぐらいのチームで移籍する提案をして、先ず私自身が昭和57年(1982年)1月にCSKに入社した。続いて、大学の後輩であり、課長をしていた笠原明道が2ヶ月位遅れて入社した。この頃入社して未だ2、3ヶ月しか経っていない状況で、すでに大川社長の事業運営の手法に大きな疑問を感じていた。そこで3人目に予定していた部下の移籍を中止する事になった。

その後CSKは東証2部上場をはたし、私は海外事業担当役員として3年ほど在籍した。その間に、CSKの海外子会社の設立、人工知能技術の導入などに努めた。

思い出に残ったのは、EDSとのつきあいである。EDSは創設者のロスベロが会長をしていて、ソフトウエアをパッケージ化して、銀行や病院の業務処理事業を次々に拡大していった。

米国の銀行は法律で州外に出られないから、小さな銀行が多かったが、EDSはそれらの銀行のコンピュータ部門を社員丸ごと買収、合併していった。その際必ず各銀行の処理経費よりは安く引き受け、移籍した技術者や社員の給与待遇も銀行より良い条件で実施するというものであった。

私は買収担当のディレクターと付き合いがあったが、遂にはCSKをも買収の対象として動き始めたが、これは完全にブロックされた。

結局私は3年半後にCSKをやめたが、その間CSKに移籍してきたIBMや旧ユニバック出身の多くの幹部と知り合いになった。やはり彼等も短期間で辞任し5年以上在籍した人は非常に稀であった。しかしCSKを辞任した旧役員、幹部が時々集まって、情報交換する会が自然発生的にできて、これが5年位は続いたと記憶している。

大川社長はその後、セガエンタープライズ(当時中山社長)を買収して、ホンダの副社長入交昭一郎を社長にすえたが、やはり短期間でやめてしまった。大川社長も年と健康には勝てず、CSKには段々と野村証券系の幹部が増えて、現在は完全に野村グループになっている。